

## カリタス女子短期大学 在学生の活躍

### 原田亜衣 (2年在学)

#### “外”から初めて見えるもの

2月24日から3月25日までの1か月間、私はフランスのルーアンに語学留学した。



ルーアンはパリからセーヌ川を北に下ったところに位置する、比較的大きな都市である。築約500年を誇るゴシック様式の大聖堂が、壮麗に佇む歴史ある街だ。また、かの有名なジャンヌ・ダルクが火刑に処せられた地でもある。

元々ジャンヌ・ダルクが大好きで、私にとってルーアンは特別な街だった。到着してからは行く

先々で「J'aime beaucoup Jeanne d'Arc!!」と愛を叫びまくり、「亜衣といえどジャンヌ・ダルク」と認識させてしまった程だ。

#### ジャンヌダルク通り

ここで私が驚いたのは、ルーアンの人々が、「最期」の地であることを肯定的に感じていることだ。実をいうと、私は「この人達の祖先が彼女を殺した」と意地悪く思っていた。ところが、私が彼女の話をして、嫌がるどころか、誰もが嬉しそうに微笑むのである。そして彼女を語る時の人々の表情には、どこか誇りすら感じられたのだ。自分の街が、乙女ゆかりの地であるという誇り。



それに気づいた時、私は少し恥ずかしくなった。自分の街は、大した特色もないと思っていたからだ。

ある日、「横浜の人って横浜好き

#### 教会内部

だよな」と言われた。そうして考えてみれば、小学生の頃は横浜市歌を大合唱していたし、かの昔黒船が来た海が見える丘にも通っていた。そして今も私は、この歌や丘が大好きだ。海があり港があり歴史がある。そうだ、私だって誇りに思える。ジャンヌ・ダルクを語るルーアンの人々のように。

留学をして、物事を多角的に捉えられるようになった。この大切な気持ちを発見できたのも、その成果の一例だ。本当に収穫の多い1か月だったと思う。



#### 博物館内

最後に、留学のために頑張った私とその先で待っていた素晴らしい時と人々に。 Merci beaucoup!!

ルーアンの地元新聞に語学研修中のカリタス女子短期大学の学生達が紹介されました。

## ●ジョルジュ・サンドの童話●

樋口仁枝(本学教授)

フランスの十九世紀を生きた女性作家ジョルジュ・サンドは、晩年二人の孫娘のために童話を書いた。十三のお話は「祖母の物語」と題して二巻に分けて出版された。

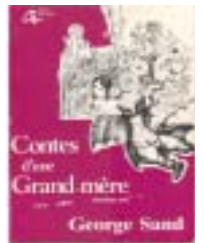
波乱に富んだ長い人生で得た知恵や教えを、幼い少女たちに残しておきたい、と願ったのであろう。

お話のほとんどは二人の孫娘、オーロールかガブリエルのうちのどちらかに、短い献辞とともに捧げられている。



記録によるとサンドは、童話ができあがるとすぐに、それをみんなの前で読んで聞かせ、子どもたちは熱心に祖母の話に耳を傾け、笑ったり涙ぐんだりしたという。どのお話にも共通することは、サンドがこよなく愛した郷里のペリー地方周辺が舞台で、豊かな自然とふしぎな人物が登場することである。自然の神秘と恵み、そして怖さがいたるところに見られ、主人公は妖精や魔女に似たふしぎな力をもった変わった人物が多い。花や、木や、動物は口をきくし、むずかしい名前前の植物や昆虫もたくさんでてくる。サンドはこれらの話によって幼い子どもたちの精神が豊かになり、心の滋養になることを願って、まるで遺書のようにたくさんの童話を書き残したのである。彼女自身、子どもころ、ふしぎな物語を読むことは無上の楽しみだったので、そういう楽しみも知ってほしかったにちがいない。

子どもの心をひきつける現代の創作童話とくらべると、どれもけしておもしろおかしい話とは言いがたい。しかしじっくりと読めば、幼い子どもたちのためだけでなく、むしろ現代に生きる若者や大人たちが読んで、何か普遍的な奥深いメッセージを受け取ることができるような気がするのである。当時のサンドの年齢にだんだん近づきつつある今、私はせめてこうした話を、古くさいとか、教訓が押しつけがましいとか言われぬように、さりげなく若い人たちに伝えていきたいものだと考えている。



## フランス大統領選から見えること

### — 移民、女性、出生率、その他 —

#### 稲葉延子(本学教授)

すでに新体制で動き始めているフランスの「政治」ですが、5年任期の大統領には、セゴレーヌ・ロワイヤル(Marie-Ségolène Royal)を破ってニコラ・サルコジ(Nicolas Paul Stéphane Sarközy de Nagy-Bocsa)が就任しました。投票率が80%を越えたことは、フランス人の政治好きと同時に、曲がり角にきたフランスをどの方向に曲げて行くのか、フランス国民の関心が深かったことを示しています。因みに、選挙権は18歳以上です。日本でこの投票率は「夢のまた夢」と思ってしまうのですが、悲観的過ぎるでしょうか。

さて、ミッテラン政権の14年、シラク政権の12年を経て、5月16日に大統領権限委譲のセレモニーが行われ、いよいよ戦後生まれの大統領誕生となりました。

この大統領選で興味深い事項はいくつもありますが、以下挙げてみましょう。二人の年齢は、二人とも50代前半で、戦後生まれです。

サルコジは、ハンガリーからの移民である父親をもつ、パリ生まれの移民二世ですが、母方はユダヤ系のギリシャです。このユダヤ系というのが気になりますが、公の場でサルコジに「ユダヤ人！」とレッテルを貼ったのは、もちろん、ル・ペン(極右 国民戦線党首)でした。確かに、ナチス政権下であれば、サルコジは紛れもなくユダヤ人です。

一方、ロワイヤルはセネガルのダカールで生まれています。ここまでで *liaisons* 読者の皆さまは、ヨーロッパの地図を描きながら、ハンガリー、フランス、ギリシャ、そしてアフリカのセネガルまで、イメージを拡げられましたか？これもまた、日本国内では、ちょっと想像しにくい部分です。

ところで、日本のメディアの切り口は、「移民二世と女性の戦い」と、この大統領選を捉えているきらいがありました。確かに、移民二世の大統領にしても女性大統領にしても、「史上初の・・・」という修飾語をつけることができます。メディア向きだったわけです。

さて、二人の職歴は、サルコジは内相、ロワイヤルは環境相で、どちらも大臣経験者でした。ただし、学歴においては、サルコジのパリ大学に対して、ロワイヤルはENA(国立行政学院)、いわゆるグランゼコールです。この点は、日本では教育制度の違いで、グランゼコールが理解されていないせいか、日本のメディアで触れられることは少なかったと思います。大学出の(大学しか出ていない)大統領なんて。。。びっくりなのですが、歴代の大統領が、みなグランゼコールの出身であることを思うと、そう、思い出してみましょう。ジョルジュ・ポンピドゥー(Georges Pompidou)、ヴァレリー・ルネ・マリ・ジスカル・デスタン(Valéry René Marie Giscard d'Estaing)、フランソワ・ミッテラン(François Maurice Adrien Marie Mitterrand)、ジャック・ルネ・シラク

(Jacques René Chirac)、、、

サルコジの外国人にもわかりやすいフランス語は、修辞表現に走らない「庶民の味方」と言われているようですが、この意味でも、新しい時代の到来と感慨深いものがあります。ドミニク・ガルゾー・ド・ヴィルパン(Dominique Galouzeau de Villepin)が、仮に大統領になっていれば、大統領の演説に、さぞ文学的な響きが、ここかしこに聞かれ、この意味の伝統は守られたことでしょう。サルコジ到来は、この歴史に少なくともいったん休止符が打たれました。

選挙キャンペーン中に「二人の掲げた標語」は、以下のようなものでした。《 Ensemble, tout devient possible. 》 《 La France présidente. 》ロワイヤルの掲げた後者は実現しなかったわけですが、果たしてサルコジが、「フランス国民を巻き込めるのか、そして何が可能になるのか」が見ものです。とりあえず、フィヨン新内閣は、15人中7人の女性閣僚を迎え、また国境なき医師団の創業者の一人、社会党のベルナル・クシュネール(Bernard Kouchner)を外務大臣に取り込むのは成功しました。

ところで、サルコジは二度の結婚で、la famille composée をつくり、セシリア現夫人の子供二人を含んで5人の子どもがいるともいえますし、ロワイヤルは社会党第一書記のフランソワ・オランド François Hollande と、1999年制定の市民連帯協定(PACS、Pacte civil de solidarité)を結んでいて、4人の子どもがいます。ところが、このパックスの説明が難しいのか、こちら余り報道されずに、あるいは、報道されても、「四児の母と母性」を強調しつつも、「正式な結婚していないのだが。。。」と歯切れの悪い説明に終わっていました。

ご存知のように、フランスの出生率は、新しい世代の新しいタイプの大統領が生まれた年に、とうとう2.01となり、欧州でもトップに躍り出ました。この数字は、食料自給率130%とともに、「フランスの底力」を期待させます。だからこそ、いささか強引なスタンドプレーも有りかと思われるサルコジをフランス人は選んだのでしょうか。いえいえ、第一回投票で、例のル・ペンが17%も獲得したことを、外国人としては忘れてはなりません。これからの5年間で、どのようなフランスになっていくのか、フランコフィルであろう *liaisons* 読者の皆さまとともに、しっかりと見守っていきましょう。

追記:その後、ロワイヤルとオランドは、パックスを解消したという発表がありました。一方、ファーストレディー就任拒否宣言をしたといわれたセシリア夫人はサルコジ夫人としてサミットに行きましたが、途中退出。アメリカ風に家族を巻き込み、「利用」しようという技は、フランスではどうなのでしょう。これもある種のフェミニズムでしょうか。

国民議会の総選挙の結果は、ご存知の通り、サルコジ(UMP)大勝利にはなりません。《 Ensemble, tout devient possible. 》は、今のところ難しいようです。

## 教授紹介

### 大賀正喜教授

1932年 台湾生まれ  
1953年 名古屋大学仏文科  
卒業、1956年東京大学  
大学院仏語仏文学専攻修士  
課程修了。青山学院大学  
助教授、立教大学教授を  
経て、現在：外務省研修所  
フランス語講師、カリタス女子短期大学非常勤講師。  
主要著書：



『現代仏作文のテクニック』『現代フランス語名詞活用辞典』(以上大修館書店)、『現代和仏小辞典』(共著)、『書きながら考えるフランス語』、『和文仏訳のサスペンス』(共著)、『方法としての仏作文』(以上白水社)

『小学館ロベール仏和大辞典』(共同編集)『プログレッシブ仏和辞典』(共同編集)『ポケット仏和・和仏辞典』(監修)(以上小学館)

『フランス語の書きとり・聞きとり練習』(中級編)(上級編)(エディッション・フランセーズ)



2004年出版  
『フランス語名詞化辞典』  
(大修館書店)

#### 「フランス語でニュースを読む」

担当：大賀正喜教授

■日時：8月6日(月)～8月8日(水)  
10時～11時半 13時～14時半

■受講料：15,000円(全6コマ)

■受講人数：15名

申込締切日：7月20日(金)

申込方法：本学プティコレッジ係宛

TEL045-901-5133

#### ■受講資格：

实用フランス語検定準2級以上

本学仏語科、仏語・仏語圏文化専攻卒業生

#### ■講義概要：

地球温暖化など世界的に重要な問題をテーマに、いろいろなフランス語の記事を読んでみたいと思います。

稲葉先生のお誘いで本学でもう10年教えておりますが、私はここへ来てようやく理想的な授業ができるようになったと喜んでます。理想的な授業とは、ひとり一人の学生がしっかりと見えて、教えていることがどこまで理解されているかがよく分かる、そんな授業のことです。学校のサイズ、クラスのサイズが小さいことも幸いして、ここは他では味わえない家庭的な雰囲気満ちています。廊下を歩くだけで、ひとり一人の学生が先生がた職員の方々しっかりと把握され、きめ細やかな信頼関係がそこから生まれているのが、すぐ分かるのです。いわゆるグローバル化が叫ばれ、競争ばかりが目立つギスギスした世の中になりましたが、私は本学には他ではめったに見られない人間の温もりにあふれた理想的な教育環境があると思っています。

私はフランス語を教えますが、フランス語が出来る出来ないよりもまず人を見ています。たとえ出来なくてもいつまでも記憶に残るいい学生がいます。

でもフランス語を教える立場から欲を言いますと、せっかく習ったフランス語だからいつまでも忘れないで欲しい、細かいことは忘れてもいいからすくなくともフランス語を読み解いたり、フランス語で表現するプロセス、早い話が辞書の引き方など、いつでも再起動できる態勢を保ってほしいと思っています。

今回の講座(フランス語でニュースを読む)ではその再起動のお手伝いできればと思います。

私の経験で言いますと、フランス語はどこまで究めても、限界のない底なし沼みたいなものです。ある分量の知識がたまったという喜びは結果であって、真の喜びはフランス語を究めるプロセスそのものの中にあると私は思っています。その喜びを知ってしまったものですから私はいまだにフランス語を続けているわけです。究める途中に出て来る疑問にはそれが細かい疑問であってもこたわりましょう。

「神は細部に宿る」とある建築家が言いました。細かくてもこだわること自体のなかに学習の醍醐味があるのです。

大賀正喜教授は、仕事を一緒にしたご縁で、1997年から本学にお越しいただき、「仏語表現法」を始めとする授業を担当していただいております。2004年に本学で、フランス語フランス文学会関東支部大会を開催した際には、特別講演をお願いし、かつての教え子である東京大学教授をはじめとする多くの教授が聴きにいらっしやいました。ここ10年の卒業生たちは、「仏作文の大賀」として学界で名を馳せる大家に、自分が書いた仏作文を、丁寧に添削していただいた思い出をもっていることでしょう。教育者としてあるべき姿勢を常日頃私も教員に見せていただき、学生ともども感謝しております。

(稲葉記)

テーマ:「フランスの女性たち」(Femmes françaises)  
 期間:2007年9月29日(土)～12月15日(土)(全8回)  
 時間:14:00～16:00  
 受講料:8,000円(一旦納入された受講料は、原則としてお返しできません。予めご了承下さい。)  
 会場:カリタス女子短期大学 大教室  
 定員:80名

ご不明の点は、TEL:045-901-5133  
 市民大学講座係りまで

	日時	講師	講座名
1	9/29 (土)	北垣 潔 (本学准教授)	18世紀のサロン文化 — ジュリ・ド・レスピナスと啓蒙思想家 —
2	10/6 (土)	樋口仁枝 (本学教授)	ジョルジュ・サンドの作品と人生 — 晩年の童話を中心に —
3	10/27 (土)	鎌田直純 (和歌山大学教授 本学講師)	近代フランスの女性作曲家 ～ナディア、リリ・ブーランジェの夢～
4	11/17 (土)	吉澤公寿 (マリー・ローランサン美術館館長)	パリが愛した女性 — 色彩の詩人マリー・ローランサン
5	11/24 (土)	エリック・ボグナール (本学教授)	D' Edith Piaf à la nouvelle chanson française
6	12/1 (土)	稲葉延子 (本学教授)	20世紀前半の知性と現場 — シモーヌ・ヴェユの劇的生涯
7	12/8 (土)	長谷川イザベル (上智大学教授)	フランス女性の歴史 — 20世紀、祖母・母・娘の三世代を見る —
8	12/15 (土)	湯原かの子 (評伝作家)	女性彫刻家 カミーユ・クロードル

■申込方法 : 受講希望の方は、葉書(〒225-0011 横浜市青葉区あざみ野 2-29-1)、FAX(045-901-5066)又はMAIL(caritas@caritas.ac.jp)にて、住所・氏名(ふりがな)・性別・年齢・電話番号・FAX番号(FAXのある方のみ)をご記入の上、**9月19日(水)迄**にお申込み下さい。(折り返し、お申込み受付通知を、葉書、FAXでお送り致します。)

■夏季休業期間のお知らせ : 8月9日(木)～8月17日(金)は、夏季休業期間です。お問い合わせは、8月8日前、又は8月20日以降(AM9:00～PM15:30迄)にお願いいたします。

■振込先 : 受付通知到着後、**9月21日(金)迄**に下記の振込先までお振込み下さいませようお願いします。(恐れ入りますが、振込手数料は、各自ご負担下さい。)

三菱東京UFJ銀行 登戸支店 普通預金  
 口座番号:4706738 口座名義:学校法人カリタス学園

又、金融機関備え付けの用紙に払込人氏名をご記入される際、あるいは、ATMで払込人氏名をご入力される際には、ご自分のお名前の前に、アルファベットの『S』をつけてお振込み手続きくださいますようお願い致します。(例:山田太郎さんの場合には「S 山田太郎」もしくは「S ヤマダタロウ」)尚、金融機関の発行する受領証が、受講許可の確認となりますので、大切に保管して受講初日にご持参下さい。

【編集後記】 パリの劇場で、「若き日のコレット、中年のコレット、晩年のコレット」と、三人のコレットが同時に語り合うという構成の舞台《Madame Colette a-t-elle une âme ?》が、評判となっています。シドニー＝ガブリエル・コレットの生涯を時間を越えて味わいながら、観客は自分の生涯も振り返るのでしょう。liaisonsの読者の方々も女性が多いと思いますが、今秋の講座に参加されませんか。様々なフランス女性の生き方を知り、何か物思う秋になるかもしれません。(稲葉)

カリタス女子短期大学  
 言語文化学科 仏語・仏語圏文化専攻

URL:<http://www.caritas.ac.jp/france/>

携帯サイト:<http://www.caritas.ac.jp/ii/>

MAIL: [inaba@caritas.ac.jp](mailto:inaba@caritas.ac.jp)

Liaisons フランコフィルのための情報誌

第5号 2007.7.4

発行人 : 稲葉延子(仏語・仏語圏文化専攻主任)

編集責任: 稲葉延子 編集協力: 内田香織